

速報 プラザウィーク2009

都市研究プラザは2007年より『文化創造と社会的包摂に向けた都市の再構築』というテーマでグローバルCOE拠点に選定された。今年は事業開始後4年目となり、我々の研究活動への社会からの期待は高まっている。そこで、毎年恒例のプラザウィークの今年度のテーマもそれになり「文化創造と社会的包摂に向けた都市の再構築」とした。

しかし、例年のプラザウィークとは異なる点がいくつかある。まず、例年行ってきたポスターセッションをとりやめ、みな成果を現場プラザベースに共有するような「プロセス」を重視したことである。ここでは、なるべく各プログラムに積極的に参加し、ユニット横断的な研究交流活動の「アクション・リサーチ」を「ドキュメンテーション」することを目指した。

具体的には、2010年1月18日(月)から21日(木)の間、現場プラザを使いながら、午後はスタディツアー、夜は現場プラザでの催し(座学・文化祭・交流会)を行った。最終日の22日(金)は、立ち位置(高原記念館、各現場プラザの拠点)に戻り全日程の総括をパネルディスカッションという形で行った。

寒空の下、連日多くの特別研究員や教員、事務スタッフ等の参加があり、活発な議論がなされた。()は最大参加人数
各日のスケジュールは以下の通りであった。

- 1月14日(木)17時～(高原記念館1階)
:キックオフ・ミーティング(45名)
- 1月18日(月)(担当教員:塚田、全)
:日本橋一龍王宮一長柄一大淀
(key-word:大阪の歴史文化遺産・都市の周縁性)(40名)
- 1月19日(火)(担当教員:水内):阿波座一西成
(keyword: 企業・起業)(25名)
- 1月20日(水)(担当教員:佐藤、藤田):豊崎一阿倍野
(keyword: 生活文化・包摂)(25名)
- 1月21日(木)(担当教員:中川、櫻田):カマン!メディアセンター
一船場一大淀 (keyword: アートと社会包摂)(35名)
- 1月22日(金)(担当教員:堀口)@高原記念館・ワークショップ
ブ(45名)

■全泓奎(都市研究プラザ准教授)



阿倍野プラザでのワークショップ風景

イベント・研究会の予定

各詳細は、都市研究プラザホームページをご覧ください。

2/1日	Monthly art cafe	第2ユニット
～28日	… 船場アートカフェ	
開講中	地域のためのアートマネジメント講座 後期	第1,2ユニット
～2/3,10日	… 船場アートカフェ他	
2/8日	国際会議「CULTURAL CITIES: Creativity and Social Inclusion in Osaka and Copenhagen」	第2,3,4ユニット
～14日	… コペンハーゲン大学	
2/11日	市民講座第3回「歴史の中の四天王寺 全3回」	第1ユニット
… 14日	… 四天王寺本坊	
2/25日	国際シンポジウム「Creating Cities: Culture, Space, and Sustainability:The CCS Conference」	第1,4ユニット
～27日	… ミュンヘン大学	
3/9日	第8回 アカデミックフォーラム in バンコク	第2,4ユニット
～10日	… チュラロンコン大学	
3/17日	第8回 アカデミックフォーラムinジョグジャカルタ	第2,3ユニット
… 17日	… ガジャマダ大学	
3/21日	第10回 日独地理学会議「格差拡大時代における新たな文化景観の形成—日独比較—」	第3ユニット
～25日	… 大阪市立大学他	
3/27日	2009 日本写真史学シンポジウム 「写真経験の社会史—「写真資料論」の可能性—」	第1,4ユニット
… 27日	… 大阪市立大学	

■特別研究員(若手)公募
G-COE特別研究員(若手)募集(平成22年2月募集分)
情報⇒ <http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/about/recruit.html>

■URP-Newsletter 次号発行予定は、2010年5月です。

URP Osaka City University | Urban Research Plaza
大阪市立大学 | 都市研究プラザ

「都市研究プラザ」は、2006年4月に誕生しました。日本最大の公立大学として、これまで都市の研究に注力し、実績をあげてきた大阪市立大学が、都市再生へのチャレンジとして立ち上げた全く新しいタイプの研究施設です。「プラザ」という名前が示すように、「都市」をテーマとする人々が出会い、集まる広場をめざしています。大阪や周辺都市、さらに海外の都市に小さいサテライト施設(現場プラザ、海外サブセンター)を設け、教員・院生スタッフが現場や海外に出て研究やまちづくり活動を行っています。また、「プラザ」は、世界第一線の都市研究者・政策家と国際的なネットワークをつくり、国際シンポジウムやワークショップを開催しています。2007-11年度グローバルCOE拠点に採択され、「文化創造と社会包摂に向けた都市の再構築」をテーマに多彩な研究プロジェクトを展開しています。

<http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/>

558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138 tel: 06-6605-2071
e-mail: office@ur-plaza.osaka-cu.ac.jp

所長 佐々木雅幸 副所長 水内俊雄 岡野 浩 富田常雄
ユニット長 1U 佐々木雅幸 2U 中川 眞 3U 水内俊雄 4U 岡野 浩
<http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/staff.html>

大阪市立大学 都市研究プラザ ニュースレター 第6号 2010年2月
編集委員会 コーディネータ 轟明眞一郎、佐藤由美、橋羽 愛
<http://gcoe.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/fellow.html>

keyword's
column

文化創造
【Cultural Creativity】

社会(環境)における文化のあり方を根源的に捉え直し、都市における創造的実践の場での臨床的な試行、検証を加えながら、新たな都市文化、いや都市そのものを再構築することの探究が、都市研究プラザにおける「文化創造」研究の核である。そのステージとして、当面、我々は大阪を含めたアジア諸都市に実験場をかまえている。

20世紀を文化面から見つめると、文化を操作し消費する対象として扱ってきたところに、大きな問題があった。文化はそのような外在の対象ではなく、我々に内在する「生き方」そのものである。その内なる力を鍛え、科学的な知見によって現在の社会や環境に立ち向かうとき、我々の道は自ら「文化の創造力を活かした社会包摂と都市の再構築」へと向かうのである。

興味深いことに、インドネシアでは、通常の方法では解決不可能な社会問題に対して、究極のアドバイスをアーティストに請うときがある。昔は、もちろん霊能者に頼っていた。それがいま、なぜアーティストなのか?それは「創造」の専門家だからだ。これは、インドネシアだけではなく、社会が大きく変革しようとしている、例えば、日本においても十分通用する話だろう。つまり、平時ではなく非常時にはルーティンの処方では効力を失う。いまこそ、創造的な処方が必要なのである。特化したアーティストを育てるのではなく、皆がアーティストになる必要があるのではないか。それは、ある意味で、アートのユビキタス化をめざすことでもあるのだ。

中川 眞(都市研究プラザ兼任研究員/文学研究科教授)

Fundamentally recasting the idea of what culture should be within society or the environment; carrying out clinical trials at the site of creative practices in the city; and while accumulating evidence, searching for a new urban culture, or indeed a reinvention of the city itself, is the core of 'Cultural Creativity' research at the Urban Research Plaza. As the stages for that, we have established experimental venues in various Asian cities including Osaka.

If one examines the 20th century from a cultural perspective, there is a big problem in that culture has been treated as an object to be manipulated and consumed. Culture is not that kind of external object, but rather a 'way of living' that exists within us. Forging the strength within that, when we confront the contemporary society and environment through scientific knowledge, our pathway itself is directed towards a 'reinvention of the city and social inclusion that utilizes the creativity of culture.'

Interestingly, in Indonesia, when confronting social problems that cannot be solved with normal means, there are times when artists are asked for the ultimate advice. In the past they were of course psychic mediums. But now why artists? It is because they are specialists in 'creativity.' This is something that not only works in Indonesia, but wherever societies are undergoing drastic change. It would for example translate well even into Japan. In other words, creative prescriptions are necessary. We believe that rather than fostering specialized artists, there is a need for everyone to become artists. This in a sense also means aiming towards making art ubiquitous.

2008年秋以来、世界経済が低迷する中、「グローバル都市」に代わる新たな都市モデルとして「創造都市」への期待が高まり、2004年にユネスコが創設した創造都市ネットワークをめぐる動きも活発化している。

2009年秋、ユネスコの創造都市ネットワークに加盟する金沢市、神戸市において相次いで国際フォーラムが開催され、創造都市をめざす諸都市も参加し、各地の取り組みに関する情報交換や、都市間のネットワークづくりにむけた議論がなされた。都市研究プラザは、これらの国際フォーラムに協力し、その成功に寄与した。

■世界創造都市フォーラム2009 in KANAZAWA

2009年10月16日(金)に金沢21世紀美術館において金沢創造都市推進委員会と金沢市の主催により開催された。

本フォーラムは、金沢市が2009年6月にユネスコからクラフト分野における創造都市として、ネットワークへの加入が認められたことを契機に「手仕事のまち・金沢」を発信するとともに、「文化と産業の連環によるまちづくり」をテーマとしながら、文化を産業につなげるための方策などを議論する目的で開催されたものである。

フォーラムの第1部では、市長のあいさつに続き金沢市独自の創造都市シンボルマーク「テトメデス」が発表された。基調講演では、まず、仏政府対外貿易顧問のフランソワーズ・モレシャン氏から「フランスの職人文化について」というテーマでフランスにおける職人文化は自国のアイデンティティを形成するが故に大切にされてきたことや金沢とフランスとの職人文化の共通性などについて報告された。また、エルメスジャパン(株)執行役員の藤本幸三氏からは「人、創造、悦び」というテーマでエルメスのものづくりの姿勢とエスプリ、職人たちの美や創造に対するインスピレーションの絶えざる更新への取り組みについて報告された。



世界創造都市フォーラム2009 in KANAZAWA

第2部では佐々木雅幸(都市研究プラザ所長)をコーディネーターに各都市の担当者の参加のもと、「文化と産業の連環によるまちづくり」をテーマとするパネルディスカッションが行われた。

ゲント市からは音楽分野の創造都市として認定された理由として、ブルゴーニュ時代から繁栄した歴史があり、常に文化に対して寛容であり、多様な芸術が交流し、新しいプログラムが展開される都市であることが挙げられた。また、創造都市政策を推進する上で「Culture:文化」、「Communication:市民や行政間などの対話」、「Cooperation:協力(とくに移民との)」の3つのCを重要視しており、市全体の予算の6%(3,800万ユーロ)を占める文化予算のうち年間600万ユーロを音楽分野で使い、近年ではさらに民間による「文化投資ファンド」が誕生していること等が報告された。

韓国の全州市からは、ビビンバ等に代表される豊かな食文化を活かすため、研究や普及活動が重要だと考え、ビビンバ研究所、バイオ産業協会、全州食文化協会などが組織されていること、さらに、様々なフードフェア、見本市などが開催されており、ユネスコネットワークに食文化の分野で登録を目指していることが報告された。

横浜市からは文化・芸術を使って都心部を活性化しようというまちづくりの視点に立った創造都市政策を行ってきていることが報告された。その特徴としてアーティスト・クリエイターが住みたくするような創造環境の実現、創造産業の集積による中心市街地の経済活性化、港町にある歴史的建造物や倉庫などといった魅力ある地域資源の活用、市民と一緒に創造都市を創るという4つを挙げた。具体的な施策としては、「BankART」や「ZAIM」など歴史的建造物をいかした創造界隈形成事業などが行われていることが報告された。

また、クラフト都市に認定された金沢市では、工芸は江戸時代よりまちの発展と深く結びつき、まちの中心部には工芸作家や工芸品店、それらを支える博物館、美術館も同様に集積していること、行政が歴史的な景観の保全に関する条例の制定や工芸に関する振興施策を数多く打ち出しており、金沢創造都市会議など官民一体となった取り組みも盛んであること等が報告され、文化と産業の連環によるまちづくりを目指した討論が行われた。

■ユネスコ・デザイン都市フォーラムin KOBE

2009年11月24日(火)、ポートピアホテルにおいて神戸市の主催により開催された本フォーラムは、デザイン

分野で認定された6都市すべての代表者が一堂に会し、各都市の多様な取り組みや今後の展望を紹介するとともに、デザイン都市間の連携交流やデザインを視点とした豊かで創造力のある魅力的な都市づくりについて議論することを目的とした。

まず、ユネスコ創造都市ネットワークの担当者、ドユン・リー氏よりその理念や意義が、各デザイン都市の代表者からそれぞれの実践が紹介された。

モンリオール市では、1990年代初めからデザインのプロモーションを行っており、特に都市の生活の質にとって決め手となるレストラン、小売店のデザインコンペを続けていること、デザイン都市認定後は都市デザインを向上させる施策を展開していること、政治家・デザイナー・市民との間の距離をより短くするためにプレゼンテーションイベント「べちゃくちゃナイト」を開催していること等が報告された。

中国で最も若い都市、深圳市では2003年に文化を基本とした都市の戦略を策定し、印刷産業、漫画、映画、近代工芸等を奨励し、文化産業クラスターが急速に成長した。2008年には文化産業の付加価値額が都市のGDPの6.88%を占めていることなどが報告された。

ブエノスアイレス市からは20世紀前半から建築やラジオ、オブジェなどのデザインが盛んであったが、1983年の民主化後、テキスタイルやインダストリアルデザインなど新たなデザインが生まれていること、2001年に大きな経済危機があったものの、全てのデザイン産業を支えるメトロポリタンデザインセンターができたことで発展を続けていることなどが報告された。

ベルリン市からは、東西ドイツ統合後、生活費の安さや創造活動スペースがあることを背景にデザイナーが集積したこと、21世紀に入り、行政もデザイナーに対して積極的な支援を行っており、GDPの21%を創造産業が占めていることなどが報告された。

また、名古屋市は1989年には第16回世界デザイン会議、世界デザイン博覧会の開催、92年には名古屋市、愛知県、日本政策投資銀行、経済団体等の出資による株式会社国際デザインセンター設立等によりデザイン産業を振興してきており、現在では人材育成、環境都市、多様な文化とのネットワークの3つをコンセプトに創造都市政策を展開していることが報告された。

神戸市からは、まちなみ、くらしの文化、ものづくりの技術という3つの神戸らしさをデザインの視点からもう一度磨きをかけることにより、新たな魅力と活力をつく



ユネスコ・デザイン都市フォーラムin KOBE

りだすことを目的に、歴史的な建築物の保存活用や神戸ビエンナーレの開催等を展開していることが報告された。

フォーラム後半では佐々木雅幸をコーディネーターに「デザインのチカラで都市をつなぐ・魅力を創る」をテーマとするパネルディスカッションが行われ、デザイン都市間のネットワークを今後どのように機能させていくことが出来るのか、課題は何かなどについて意見が交換された。

■辻 堅太郎(所長アシスタント・RA)

In the cities of Kanazawa and Kobe, which have recently joined the UNESCO World Creative Cities Network, two international forums were held in succession, and the Urban Research Plaza collaborated in both forums.

On October 16, 2009 (Fri.) the World Creative City Forum 2009 in KANAZAWA was held on the occasion of Kanazawa's joining the UNESCO Creative Cities Network in the Craft category. At the forum there were reports from representatives of the cities of Ghent (Belgium), Jeonju (S. Korea), Yokohama, and Kanazawa, who held a group discussion. There was also a round table panel on the theme of "Urban Development through Linkages of Culture and Industry."

Subsequently, on November 24, 2009 (Tue.) the Cities of Design Forum in KOBE was held. Representatives from the UNESCO Creative Cities of Montreal, Shenzhen (China), Buenos Aires, Berlin, Nagoya, and Kobe appeared together on the same platform and discussed how to promote collaborative exchanges between design cities, how to develop attractive, creative, and thriving cities with a focus on design, and how a network of design cities should function.

2009年11月16日(月)から21日(土)までの6日間、船場アートカフェの主催で船場の街を会場に、「まちのコモンズ2009」を開催した。前身である「船場建築祭」の開催から数えると今年で4回目となる本プロジェクトは、船場アートカフェが毎年開催する数多くのプロジェクトの中でも、最も規模の大きなものである。

■まちのコモンズとは

「まちのコモンズ」とは、街の様々な空間資源を活用して、地域がもつ歴史や文化などを広く一般に発信することによって、都市空間の文化的共有による地域活性化の可能性を探ろうとするものである。今年は昨年の高麗橋2丁目に隣接する伏見町2丁目、道修町2丁目を加えた3町に拡大し、東西約200m、南北約100mのエリアが対象となった。船場は商都大阪の中心として栄えた歴史的都市であるが、近年は産業構造の転換や長引く不況によって街から活気が失せ、そこに超高層マンションの建設などによる新居住者が出現するなど、その変化に対応できずに多くの問題・課題を抱えている。本プロジェクトは、大きな潜在力を持ちながらも、その文化力を発揮できない船場の変革を視野におさめた取り組みである。2006年と2007年はとりわけ近代建築を対象に活用可能性を検証したが、2008年からは近代建築に限らず、街に潜む様々な空間資源に着目し、その場所がもともと持つ魅力を引き出したり、あるいは新たに外部からアートを投入することで活用可能性を実証するといったことを試みている。

■街を会場にした様々なプログラム

実施された具体的なプログラムは以下の通りである。まず初日から5日目まで毎日開催したのものとして、「アジア音楽ライブ」と「まちかど映像展示」がある。アジア音楽ライブでは高麗橋にある三井ガーデンホテル淀屋橋の公開空地に仮設ステージを設置し、日替わりでアジア各国の民族音楽がプロの演奏家らによって演奏された。街の雑踏に混じるアジアの調べに足をとめ、夕方会社帰りに多くの人が耳を傾けた。まちかど映像展示では道修町に面した薬品関連企業の2つのビルのエントランスに仮設スクリーンを設置し、日没から通りに向かって2つの映像を上映した。道修町の歴史を江戸時代から現在までわかりやすく解説した映像番組と、道修町の祭りである神農祭の風景を写した昭和30年代の8ミリフィルム映像である。ちょうどまちのコモンズ終了の翌日からはじまる神農祭にあわせて、祭りや街の歴史に対する関心を高めてもら

おうという意図をもっていった。

最終日である21日(土)には高麗橋に建つ近代建築のひとつ、1930年建築の浪花教会の礼拝堂を会場に、「文化・芸術によるまちづくりの可能性」と題してシンポジウムを行った。京都の中心市街地にある旧・立誠小学校校舎を拠点に地域の文化・芸術振興を推進する京都市の宗實良彦氏を基調講演に招き、船場アートカフェからは嘉名光市(工学研究科准教授)がまちのコモンズについて報告を行った。また、シンポジウム開催前には市大の学生などによって組織される「船場研究体」がガイドとなって、船場を案内する「北船場まちあるきツアー」が実施された。更に船場研究体ではこれにあわせたガイドマップも作成した。



シンポジウムが行われた浪花教会の様子

今年のまちのコモンズで特徴的だったのは、毎日テーマと会場を変えながら行った「セミナー&サロン」シリーズである。月曜日から金曜日までの5日間、さまざまな歴史的空間で船場の文化力を多彩なラインナップで紹介して好評を博した。16日(月)に開催した「芦屋小雁が語る『番頭はんと丁稚どん』」は、フィルムコレクターとして知られる俳優・芦屋小雁氏にコレクションを上映しながら語ってもらうトークショーであった。会場は重要文化財に指定される旧・小西家住宅(1903)で、薬種業を営む大商家であった、船場でも数少ない木造町家の遺構である。そこで上映した『番頭はんと丁稚どん』は昭和30年代に大きな人気を博したテレビ番組の映画化で、まさに道修町の薬種問屋を舞台に繰り広げられるコメディドラマであった。フィルムには当時の道修町をはじめ、大阪各地の名所も出てくる。芦屋小雁氏は丁稚の一人としてこの映画に出演した本人である。江戸時代から続く薬のまちで、明治時代に建てられた薬種問屋の座敷を会場に、高度経済成長期に撮られた道修町を舞台にしたコメディを上映し、出演した俳優から当時の話を伺うという、まさにまちのコモンズに相応しいプログラムとなった。



芦屋小雁が語る『番頭はんと丁稚どん』

その他、17日(火)には葉の神様として知られる少彦名神社(登録文化財)を会場に、宮司の別所俊顕氏から道修町を見守り続けた神社の歴史を伺う「初心者のための神農さん講座」を行い、18日(水)には高麗橋にある高級老舗料亭「吉兆」を会場とした「吉兆お餅つき」でつきたての餅を雑煮にして振る舞った。19日(木)には高岡伸一(都市研究プラザ特任講師)がガイドとなって「近代建築ナイトツアー」を実施、普段なかなか内部へ入ることのできない町内4カ所の近代建築を巡ってその魅力を解説した。20日(金)にはその近代建築のひとつである伏見ビル(1923・登録文化財)を会場に、劇作家のわかぎ糸ふ氏を招いて「『レトロ』がきらわっていた頃の話」と題した対談を行った。故・中島らも氏がかつて1980年代に伏見ビルに事務所を構えていた時期があり、当時をよく知るわかぎ氏に昔話を語ってもらい、現在と当時のレトロ建築をめぐる状況の違いや、船場を舞台にした劇作もある氏ならではの話を伺った。

■まちとの協働

「まちのコモンズ」は船場アートカフェ単独で開催することはできない。まちの方々の協働が不可欠なプロジェクトである。今回も3町の各振興町会との共催とし、特に町会長の各氏には企画段階における関係者との調整や、町内での広報などで大きな協力を得た。また船場地区の修景やまちのにぎわいづくりを目的に組織された船場地区HOPEゾーン協議会とは、同時期に開催される互いのイベントに関して広報協力などを行っている。その他堺筋の文化活動を行う堺筋アメニティ・ソサエティや、船場のまちづくり活動の集合体である船場げんきの会などにも側面からの協力を要請した。このようなイベントをきっかけとして築かれる横のつながりは、イベントのみならず今後の船場のまちづくりにおいて更に重要性を増すものと思われる。

■成果と今後

「セミナー&サロン」の会場などで実施したアンケートによれば、参加者の満足度は非常に高く、まちの活性化に貢献する意義ある試みとして高い評価を受けた。本プロジェクトの目的は短期的には多くの参加者に船場という街の魅力を感じ取ってもらうことであり、今回「まちのコモンズ」全体で延べ約800名の参加を得て多くの方から評価を得たことはひとつの成果といえる。

しかし長期的には本プロジェクトを一過性のイベントとして終わらせるのではなく、地域に根付いた催しとして如何に定着させていくかを考えなければならない。前回・今回と企画段階において街の人々の横のつながりが生まれ、それがイベントの終了後も日常的なコミュニケーションのきっかけとなるなど一定の成果は生まれているが、今後は地域の人々や組織などに企画の最初期段階からより深く参画してもらい、主体性をもってプロジェクトを組織・実行してもらえる体制づくりを考えなければならないだろう。来年度の開催に向けて、対象範囲の設定も含め、そのあたりが大きな課題となる。

■高岡伸一(都市研究プラザ特任講師)

Over a six day period from November 16 to 21, 2009, the Senba Art Cafe sponsored the 'Urban Commons 2009' program using the Senba neighborhood as a venue. This project is an attempt to explore the possibilities for revitalization of the area, utilizing the various spatial resources of the neighborhood to popularly disseminate the history and culture of the area. This year the program focused on the three areas of Korabashi 2-chome and the adjoining Fushimi-machi 2-chome and Dosho-machi 2-chome neighborhoods. A number of different programs were put on at the Senba Art Cafe aimed at these neighborhoods which have not adapted well to changing times and which are confronting many difficult issues, and ways were considered of drawing out the underlying history and culture of the area. Specifically, live performances of Asian music were held in the public open spaces of buildings, films relating the history of the area were projected in the neighborhood in the evening, and a symposium was held using as its venue the chapel of a church which is a historical building in the neighborhood, among other events. Additionally, a panel discussion was held in a traditional wooden residential building which has been designated as an Important Cultural Property, there was a tasting event at an old restaurant, and there were lectures on its history held at a shrine which supervises traditional observances in the neighborhood. A total of about 800 people participated in all these events. This program is scheduled to be repeated next year. A big issue is likely to be how to get more people from the neighborhood to participate more deeply in the events for next year.

小さな国際シンポジウム「縮小都市の創造性」

A Small International Symposium and Workshop 'The Creativity of Shrinking Cities'

都市問題研究会+都市研究プラザは2009年10月31日(土)、11月1日(日)、「小さな国際会議/ワークショップ「縮小都市の創造性」(主査:矢作弘(創造都市研究科教授))を開催した。世界の人口10万人以上の都市の25%が、また日本の同規模の都市の50%前後が、人口減少する縮小都市となっている。「21世紀の都市の基本的な一類型は縮小都市になる」という基本認識を踏まえ、国の内外から多様な分野の研究者、実務家を招聘して密度の濃い研究会を持つことが出来た。

「小さな国際会議」は31日、創造都市研究科梅田キャンパスで開催され、佐々木雅幸(都市研究プラザ所長)の挨拶の後、Dong-Chun Shin氏(私鉄連盟副会長、韓国)「日韓の釜山都市に関する事例研究」、Terry Schwarz氏(ケント州立大学アーバンラボ、米国)「軽やかなアーバニズム——縮小都市と即興的なアプローチ」、Thorsten Wiechman氏(ドレスデン工科大学教授、ドイツ)「ヨーロッパの縮小都市——創造的問題解決のための挑戦と機会」、Jasmin Aber氏(建築家、米国)「縮小都市対策としての創造的な協働のアプローチ」のプレゼンテーションがあった。

都市問題研究会のメンバーに加え、創造都市研究科院生など約70人が参加した。各プレゼンテーションに対して会場から積極的な質問が飛び出し、スピーカーとの間で熱心な質疑があった。最後に、都市問題研究会のメンバーのひとりである加茂利男(都市研究プラザ特別研究員/立命館大学教授)は「縮小都市が都市政策研究の新たなテーマとして注目されるようになっている事情に興味深く聴くことが出来た」と発言し、会議をまとめた。

1日のワークショップは宿泊施設に改装した京町家(京都西押小路)で行った。岡部明子氏(千葉大学准教授)「規模縮小で蘇る「空間の履歴」と長尾謙吉(経済学研究科准教授)コメント、Natacha Avelin氏(フランス国立科学研究センター)「縮小都市と私鉄経営」、瀬田史彦(創造都市研究科准教授)と



Terry Schwarz氏のプレゼンテーション

金淳植(G-COE特別研究員)コメント、大西隆氏(東京大学教授)「人口減少時代の都市計画」のプレゼンテーションやコメント、討議を行った。また、前泊した参加者18人は深夜まで都市再開発やコミュニティの再生などについて議論をする機会を持つことが出来た。



京町家でのワークショップ

2日間の発表、質疑応答を通して「都市の成長/開発を管理するために考え出された規制(都市計画)は都市縮小の時代には上手く機能しない」という共通認識が得られた。すなわち、適切に規制緩和することによって即興的、一時的、かつ創造的な資源の活用を道を開くべきとの認識を得た。これらの成果は、プレゼンターのディスカッションペーパーを基に「地域開発」(日本地域開発センター)2010年3月号で特集する予定になっている。

■矢作弘(創造都市研究科教授)

The Urban Problems Research Association and the Urban Research Plaza held "A Small International Symposium and Workshop 'The Creativity of Shrinking Cities'" on October 31 and November 1, 2009, at the School of Creative Cities Umeda Campus and at a Machiya in Kyoto City. Four speakers were invited from overseas, and roughly 70 people participated on the first day of the conference. There was a lively debate over the two topics: 1) Are there commonalities in the situation of many cities around the world that are experiencing population decline? and 2) In not taking urban shrinking negatively, but rather seeing it as an opportunity for 'Growing Smaller and Smarter', how should existing urban resources be utilized productively?

Through presentations and discussions on the second day, a common consensus was reached that: "In an age of shrinking cities, the urban planning regulations that were devised to regulate urban growth and development do not function effectively."

豊崎プラザ

大阪らしい長屋と路地の再生実験

現場プラザ短信①

第4回長屋路地アート

2009年11月21日(土)、豊崎の交流イベント「第4回長屋路地アート」を開催し、豊崎プラザや周辺の住人、大学関係者など約70名が参加した。防火訓練では長屋に住む人たちの防火対策への関心を高めてもらうため、長屋の1軒から出火という想定で、消防署に電話する『通報訓練』や水消火器を放射する『初期消火訓練』を参加者一同で体験した。年配の住人には「消火器の使い方がわかった」と喜ばれた。



水消火器で消火訓練を行う様子

昭和の暮らし展では、ブリキのおもちゃなどが若い学生の興味をひいた。住人から拝借し、展示した昭和初期～中期の写真は、今では改変・消失した長屋が写る貴重なものであった。長屋では陶芸作家による「3つのうつわ展」が開催される空間で学生がカフェを開き、また豊崎・中崎町の長屋や景観を分析・提案した作品展も行った。今回の目玉となる子供落語には大阪くらしの今昔館の子ども落語大会優勝者の小学1年・3年生の兄弟が名古屋から駆けつけ、大人顔負けの好演に参加者一同大いに笑い、喝采の拍手を送った。

同日、別の長屋でも、アートイベントや陶芸作品展が催され、豊崎プラザ界隈は一日中、華やかな空気に包まれた。

■綱本 琴(豊崎プラザ研究補助スタッフ)

梅田に近い都心にあり、大正年間に建設された主屋と長屋建の貸家群、路地が残る一郭です。オーナーと大学が共同して、老朽化した木造住宅の耐震設計、快適な住生活、住宅経営、居住環境の整備を柱に、都市住宅としての長屋の再生モデルを目指し、居住文化の継承や市民の生涯学習なども含めて、創造的なまちづくりを進めています。

和泉プラザ

「地域の歴史的総合調査」の取り組み

現場プラザ短信②

和泉市室堂町・横田滋氏所蔵史料調査

和泉プラザでは現在、2009年9月に和泉市納花町を対象に実施した合同調査について、その成果をまとめた報告書作成に取りかかっている。

また、和泉市室堂町の横田滋氏所蔵史料について、2009年9月7(月)～9日(水)に第一次調査、続いて2009年12月14(月)～17日(木)に第二次調査を行った。横田家は、近世に池田谷七ヶ村(三林・室堂・和田・万町・浦田・鍛冶屋・池田下)を氏子にもつ三林村春日神社の神主を務めた家であり、その関連史料が残されている。すでに所蔵者自身が史料の一部を整理・翻刻し、史料集『泉郡三林村春日社古文書』で紹介しているが、今回の調査によって大量の未整理の古文書を発見することができた。本史料群によって、神社を中心とした和泉・池田谷の地域社会の解明が進むことになるだろう。

■久角健二(和泉プラザ研究補助スタッフ)



史料群の保存状況を記録している様子

大阪市立大学日本史研究室と和泉市教育委員会と、毎年夏に実施する和泉市合同調査を、主要な活動として位置づけています。毎年、和泉市内の1つの町会を対象に、地域の歴史を多様な方法から総合的に調査し、地元住民とともに地域の生活構築の歴史を学んでいます。

クリエイティブセンター阿波座

クリエイティブな都市型産業の連携推進と政策研究の拠点

現場プラザ短信③

ぺちやくちゃ× Creative Stream OSAKA



ぺちやくちゃ大阪の参加メンバー

2009年11月21日(土)、「大阪創造都市市民会議」、「クリエイティブストリーム OSAKAを盛り上げる会」との共催で、大阪市役所ロビーを会場にクリエイティブイベント「ぺちやくちゃ×Creative Stream OSAKA」を開催した。このイベントは世界250都市以上で開催されているクリエイティブイベント「Pecha Kucha」(<http://www.pecha-kucha.org/>)の大阪初開催のもので、会場には20組以上の発表者と300人以上の観衆が詰めかけた。

「Pecha Kucha」は、都市にいるクリエイティブな人々を市民が知り、交流できるフォーマットとして、民間による創造都市の非営利な促進に効果があり、この大阪初かつ市役所ロビー初の都市経済系イベントにおいても、社会起業家、デザイナー、園芸家など広く創造性のある営みを行なっている先導的若手がそれぞれの活動を発表し、広い視野でのそれぞれの創造的な連携の可能性が生まれるものになった。

2010年1月、都市研究プラザは扇町プラザを西区に移転させ、「クリエイティブセンター阿波座」となった。今後もこのような大阪における創造的な活力の顕在化と連携による実践的研究を広げて行く予定である。

■岡田智博(クリエイティブセンター阿波座研究補助スタッフ)

デザイン関連産業を中心とする事業者集積地域の中心に位置する本プラザは、クリエイターのオフィススペースが入居する改装されたビルの一室にあります。ここでは、「扇町プラザ」の機能を引継ぎ、大阪市全体の創造産業を対象に、その発展に向けた政策研究と連携活動の推進をめざします。

大阪ピクニック02「坂」

Osaka Picnic 02 'Hillsides'

2009年10月9日(金)、12日(月)、16日(金)の3日間、船場アートカフェの主催で『大阪ピクニック02「坂」』を開催した。舞踊家であり船場アートカフェのレジデンシャル・アーティストでもある佐久間新氏をナビゲーターに、大阪という都市をピクニックするように歩いてみることで、新たな「都市」の感じ方、楽しみ方を開発しようというワークショップである。身体に直接働きかける都市の要素として「坂」をテーマに設定し、感覚を研ぎ澄ませることでみえてくる都市と身体との関係性をあらためて考えることが目的だ。

本ワークショップは2009年3月に開催した第1回の続編で、前回行くことのできなかった天王寺から西成区・天下茶屋の範囲を歩くことにした。参加者は10名であったが、意欲的で多彩な方々が集まった。ワークショップ全体は3日間からなり、第1日は船場アートカフェでミーティングを行い、参加者各自の興味や体験などからコース設定を考え、道程で何に注目すべきかが話し合われた。2日目がピクニックの日で天王寺駅に集合し、まずは阿倍野区と西成区の区境界に沿って南に歩いた。境界に沿って崖に近い高低差が続くこのエリアでは、崖の上下をつなぐ急な階段を上ったり下ったりしながら南へ進む。崖の上下では視界の広がりはもちろん、風や肌に感じる空気の感触が大きく変化する。道程の中ほどでは標高14メートルの聖天山にある正圓寺で佐久間氏が石畳の階段を転げ落ちる(ダンスする)パフォーマンスを披露し、参加者は水の流れになったつもりで階段を下ってみた。本プロジェクトのテーマは「坂」であったが、坂に限らず参加者がそれぞれの感性で多くの魅力や面白みを発見し、参加者間で共有し合うことが試みられた。今回はサウンドアーティストの小島剛氏がゲスト参加したが、住宅街の静かな公

園では全員沈黙して街のサウンドスケープに耳を澄まし、高岡伸一(都市研究プラザ特任講師)は建築家の立場から古い建物の年代を特定するポイントを解説し、そこから街の歴史に思



正圓寺の階段で水の流れになる参加者

いを馳せてみることも行われた。全行程で4時間強のピクニックのなか、このようなワークショップが度々行われたのもまた、大きな収穫であった。

第3日は再び参加者が船場アートカフェに集い、船場アートカフェのディレクターである本間直樹氏(大阪大学コミュニケーションデザイン・センター准教授)が撮影した記録を観ながらピクニックを振り返り、今後の展開に向けて議論を深めた。大阪ピクニックはシリーズ化し、そこから得られた成果をメソッド集としてまとめる予定である。

■高岡伸一(都市研究プラザ特任講師)

Over three days on October 9 (Fri.), 12 (Mon.), and 16 (Fri.), 2009, the "Osaka Picnic 02 'Hillsides'" was held under the sponsorship of the Senba Art Cafe. With Mr. Sakuma Shin, who is both a dancer and Artist-in-Residence at the Senba Art Cafe, as navigator, this was a workshop attempting to develop ways of experiencing and enjoying 'the city' by walking through the city of Osaka as if on a picnic. Ten people participated, walking from Tennoji to Tengachaya over the course of about 4 hours, holding a number of workshops along the way on stairways and hillsides, in residential neighborhoods, and in parks, and they considered the relationship between the city and the body that becomes clear from immersing one's sensations in the experience.

研究員紹介シリーズ 1

Hannu Kurunsaari

「リサイクルを通じた持続可能な都市づくり」について
The Sustainable City through Recycling

私の主要な研究テーマは、持続可能な都市である。持続可能な都市は、芸術と環境を支えとした経済活動のもとに成立するため、経済的・社会的・環境的側面などの全てにおいて、研究を深めなければならない。



おおさかATCグリーンエコプラザにて

現在、私は、都市のリサイクル・セクターに注目し、研究を行っている。リサイクル事業は、雇用創出、原料の再利用、環境負担軽減などの点において、持続可能な都市の実現に多大な貢献をしていると考える。そして、多くの場合、ネットワーク事業の形を取る。ネットワークのメンバーでなければアクセスできない、様々な資源と組織能力(ケイパビリティ)がある。ネットワーク事業における個々のメンバーの目標は、社会的目標から純粋に財務的な成功に至るまで、幅広く、異なるかもしれない。ネットワークのメンバー内で、目的と価値創造のためのロジックが違う場合、ネットワークの継続のために大きな問題が生じるため、ガバナンスおよびコントロールの仕組みが必要になる。このような問題を念頭に置き、リサイクル・ショップのフランチャイズチェーンにおける、ネットワークの開発と維持のメカニズムについて調べた。その結果、わかってきたのは、上述したように、ネットワークのメンバーに様々なケイパビリティと資源—たとえば、ブランドネーム、知識、資金、修理サービス、学習機会—が与えられることである。

以上のように、私は、持続可能な都市を中心しつつ、自動車のエコデザインを行う際のケイパビリティやバランススコアカード(BSC)の実行によるフィンランドの都市の経営実践改善に関心を持ち、研究を続けている。

■ハンヌ・クルンサアリ(G-COE特別研究員)

The recycling sector has a big role in contributing to the sustainable city through creating jobs, reusing materials and reducing the environmental burden. Recycling enterprises often take a form of a network enterprise. In particular, the author investigates how recycle enterprises maintain and develop capabilities and share resources through the network.

海外サブセンター便り from Melbourne

URP Melbourne sub-center

メルボルン・サブセンター

2009, our first full year of being a member of the URP, has been a year of project planning and assessment of social inclusion issues in part of Melbourne. We began the year with a two-day workshop, involving a substantial group of members from Osaka City University, joint with staff of the University of Melbourne and our associated University, Victoria University and local community social workers. In this workshop and a number of subsequent meetings, we have been planning and organizing our 'action research' in the inner western region of Melbourne. This has involved a series of discussions with community and government leaders, data collection about demographic and socioeconomic elements of social exclusion, and workshops generating ideas for our initiatives. We are actively seeking funding from various agencies for the implementation of such action research. Our plan going forward is to survey socially excluded people in that region in order to measure their 'demand' and from that to brainstorm solutions, then to catalyze the implementation of those solutions. Important research outcomes would result from the trialing of methodologies from all these steps, assessment of the nature and extent of social inclusion, and measurements of the effectiveness of any such interventions.

■Danny Samson(メルボルン大学商経学部教授)



From front: Ms. Samantha Boorn, Mr. Max Ogden, Mr. Richard Gough, Dr. Suzy Goldsmith, Prof. Danny Samson

初年度の2009年は、一地域の社会的包摂問題の事業計画と査定を行った。年頭に様々な関係者が参加したワークショップを行い、市の西部に「実地調査チーム」を結成した。地域社会や行政の指導者と議論を重ね、社会的排除に関する人口統計・社会経済的要因のデータを集め、構想発案の為のワークショップを開催した。いずれは、地域の社会的排除対象者の需要を測定しその打開策を調査の上、解決策の実施を促進したい。

船場アートカフェ

芸術によるコミュニティ再構築

芸術がもつ「接合/媒介する力」に焦点をあて、都市における芸術の可能性を追求しています。大阪固有の文化資産に着目しつつ、芸術を介して人と人をつなぐ新しいコミュニケーションの場を創造する試みを展開します。

プライベート美術館@大阪・南船場

2009年11月19日(木)から12月25日(金)まで、船場のまちなかに障害のある人の作品を展示するイベント「プライベート美術館@大阪・南船場」(主催:財団法人たんぼの家、協力:船場アートカフェ他)が開催されました。



難波神社では巨大絵馬が展示された

このイベントは、まちに集まる様々な人たちの間にアートを通してコミュニケーションを生み出すという趣旨で企画され、中間支援組織エイブルアート・カンパニーに登録している15名のアーティストの作品がアパレルショップやカフェ、神社など12ヶ所に展示されました。自ら展示作品をセレクトしたというアパレルショップでは、鮮やかな色彩と力強いタッチで描かれた作品が服のもつ雰囲気と調和をなし、ハイブリッドなアートスペースが出現していました。

ショップで物を買うだけではなく、美術館で作品を見るだけでもない、アートとまちと人がゆるやかにつながっていく光景。このようなユニークな取り組みが、アートを媒介とした社会包摂の実践として今後社会に広まることが期待されます。

■石川 優(船場アートカフェRA)

URPとの緊密な連携によるホームレス支援全国ネットワーク研修の開催

Coalition Between URP and National Homeless Support Network

2009年10月9日(金)・10日(土)に、ホームレス支援にかかわる実践者・研究者が全国から集まり、都市研究プラザと厚労省の後援により、各地の事例やさまざまな研究成果から学び合う研修会を、千葉県市川市で開いた。日本で唯一の全国の民間のホームレス支援団体のネットワークであり、社会全体のホームレス支援のあるべき姿を模索する取り組みである。

このネットワークや研修の紹介にあたって、都市研究プラザとの関係の系譜について記しておきたい。2005年4月より1年後の本格開設をめざして都市研究プラザの開設準備委員会がスタートし、その委員メンバーとして第3ユニット長の水内俊雄が参画していた。都市研究プラザの起動エンジンとしてソーシャルサーベいの連鎖を企画し、具体的な調査主体として、大阪就労福祉居住問題調査研究会を、水内を代表として立ち上げた。大阪市立大学、大阪市役所のみならず大阪府立大学や近隣大学、民間プロフェSSIONナル、NPOなどの人などと、運営組織を結成した。

最初の調査は、大阪市健康福祉局の委託調査「西成区の生活保護受給者の現状」(2005年度実施)であり、続いて全国規模の「もうひとつの全国ホームレス調査」(2006年度実施)、これは人権運動ネットワークの虹の連合の委託調査であった(他にも新宮市などで数調査も受託して、調査書を刊行している)。同時に都市問題研究の助成プロジェクトで、「大阪市西成区の救護施設今池平和寮の取り組み」(2007年度実施)を実施した。特にもうひとつの全国ホームレス調査では、旭川から那覇まで、65団体、800名近い当事者への聞き取りを行った経験が、全国支援組織のネットワーク結成にスムーズにつながったといえる。

2007年4月に任意団体として、ホームレス支援全国ネットワークが大阪で設立され、2008年2月に第1回全国研修を都市研究プラザの主催で東京で(GCOE Report Series1)、そして2008年5月には第2回全国研修を西成プラザで行った(GCOE Report Series2)。今回の研修は、NPO法人化するのを契機に、第3回目の全国研修として開かれた。

研修は2日間にわたり、会場となった千葉県市川市で活動するNPO法人ホームレス自立支援ガンバの会をはじめ、大阪で活動するNPO法人釜ヶ崎支援機構や、東京のNPO法人自立支援センターふるさとの会、NPO法人北九州ホームレス支援機構などから報告があった。「諸団体のもつ多様性こそホームレス支援活動全体にとって豊かさそのものである」とのホームレス支援全国ネットワーク理事長奥田知志氏(NPO法人北九州ホームレス支援機構)の言葉通り、それぞれが地域と向き合いながら形にした活動の広がりが垣間見られ、地域の実践に関わりつつ、そこから

見えてくる問題の構造や支援の可能性なども報告された。

ホームレス支援全国ネットワークの理事には水内も加わり、都市研究プラザの研究者が多く関わる釜ヶ崎のまち再生フォーラム等も会員として参画している。実践者・研究者をはじめ、様々な関心からのアプローチを橋渡しし、ホームレス支援における大小さまざまな取り組みの歯車をかみ合わせていくことが、都市研究プラザの役割でもある。民間団体による個々のホームレス支援が、「公」を含めた社会全体への枠組みとして動き出していくために、このネットワークの取り組みや実践は大いに期待され、都市研究プラザの貢献が大いに期待されている。その実践の媒体として、雑誌「ホームレスと社会」(明石書店)がURP出版助成により、昨秋、創刊された。

■平川隆啓(G-COE特別研究員)、
水内俊雄(都市研究プラザ教授)



元厚生省社会・援護局長 炭谷茂氏のプレゼンテーション

On October 9 and 10, 2009, practitioners and researchers involved in assistance for the homeless gathered from all over the country in Ichikawa City, Chiba Prefecture and held a study session where case examples from various locations and research findings were reported on. National Homeless Support Network, the only nation-wide private network for aiding the homeless in Japan, marking the occasion of becoming a legally-recognized NPO, participated in this event, with the support of the Urban Research Plaza and the Ministry of Health and Labor.

Acting through private assistance groups, the network moves forward through practical work, serving as a mediator for assistance related to the homeless being dealt with in many different locations, formulating means for mutual cooperation, and making policy proposals to the Ministry of Health and Labor and other official bodies. The Urban Research Plaza also supported this project in all respects, and the construction of a homeless assistance system was discussed from both practical and research perspectives by the participants, beginning with the practitioners from various locales, and including researchers from the Urban Research Plaza and other bodies.

西成プラザ

生活困窮支援の老舗西成での実践を世界発信

釜ヶ崎をはじめとする西成区北部には、社会的に有利でない状況が蓄積しています。釜ヶ崎の一角に集会・研修のスペースを持つ本プラザは、多くの公的組織、NPOと連携し、地域の諸活動に関わりながら、都市問題の本質を社会に伝える、実践的な研究ネットワークから構成されています。

調査と実践の社会実験道場

西成区には、日本最大の日雇労働者の集住する簡易宿所街、寄せ場のあいりん地域＝釜ヶ崎、日本最大の被差別部落の西成地区、在日コリアンの集住、日本でも最も高密度な木賃アパートの集中、かつての遊郭の系譜をひきつぐ料亭地区などが隣り合わせで分布しています。生活保護率の高さや平均余命の短さなどにおいても突出し、ホームレスや人権というグローバルな課題に、さまざまな人々や組織が、さまざまな関わりのもとで、取り組みを行っています。都市研究プラザもこうした組織のひとつであり、その中で西成プラザは、グローバルな知の構築が可能な空間＝西成区において、実践の社会実験道場という機能を果たしています。

2006年に活動を開始した大阪就労福祉居住問題調査研究会(<http://www.osaka-sfk.com/>)は、本誌別項で触れられています。釜ヶ崎の再生フォーラム10年誌編集チームは、1999年から本格化したフォーラムの活動記録をまとめ、同時に1960年代ははじめからの写真アーカイブ事業も行っています。本年度、居住サポート研究会(代表:水内)において、西成区全体の住宅市場の現状と居住サポートのあり方を調査しています。また、密集市街地研究会(調査代表:全)において、被差別部落や在日コリアン集住地区における居住福祉のあり方の調査を、刑余者支援ネットワーク(調査代表:水内)において、矯正施設退所者の地域居住支援ネットワーク構築のための調査を行っています。

■水内俊雄(都市研究プラザ教授)

現場プラザ短信5

大淀プラザ

ホームレス支援から地域のネットワーク/人材の創造

旧大淀区天七に立地し、近接して更生施設や一時保護所、ホームレス自立支援センターの大阪市の日雇、ホームレス支援施設があります。元銭湯を利用した本プラザは、ホームレス現象のオブザーバトリ(観測所)として後方支援にあたり、同時に広い空間を利用した、アートによる地域ネットワーク創造、人材創出の拠点をめざしています。

大淀プラザ新装開店！と芋プロジェクトのその後

2009年10月より、(旧)長柄プラザは天神橋筋7丁目に移り、「大淀プラザ」として生まれ変わりました。最大の目玉は、かつてのお風呂屋を利用している点で、木造りの番台、タイル張りの浴槽、見慣れた洗面器などが営業当時のまま残されています。男脱衣場を大淀プラザとして活用し、それ以外の空間は天神橋アートセンター(次号で紹介)として運営委員会主体で活用されることになっています。脱衣場だけでも30名程度が利用できる広さがあるため、イベントや研究会などに活用でき、白いタイルが印象的な浴槽はアート作品の展示スペースとなります。また引き続き、更生施設「大淀寮」の利用者及び退所者(OB)のモニタリングを実施していく予定です。

さて、「2009芋豊作プロジェクト」のその後ですが、ホームレス自立支援センターOBで植栽技術者の指導のもと畑は再生され、10月21日(水)、地域の幼稚園や保育所の子どもたちを招待して芋掘り大会が行われました。園児以上にはしゃぐ老人会スタッフ、大淀寮OBの姿が印象的でした。

■葛西リサ(G-COE特別研究員)



芋掘り大会の様子

現場プラザ短信6

阿倍野プラザ

近代長屋を活用した居住支援プロジェクト

阿倍野区の洋館付き長屋を活用した本プラザは、「生と死の質」に焦点を当てた活動を展開しています。高齢者のサロンや町家・長屋を使った店舗による街おこし、伝統建築の技術を継承する団体などと密接に連携しながら、街歩きや生涯学習などを通して、住民の豊かな暮らしを支える拠点として機能します。

阿倍野Religion-Cafe 近況報告



第4回Religion-Cafeの様子(本田神父講話)

2009年8月25日(火)から、毎月一回開催しているReligion-Cafeも、2009年11月25日(水)で4回目を迎えた。初回から第3回までは浄土真宗入門ということで、浄土真宗南冥寺住職、戸次公正氏を迎えて、さまざまな切り口から浄土真宗についてわかりやすく教えていただいた。クリスマスの1ヶ月前となる第4回目では、大阪市の釜ヶ崎で活動する本田哲朗氏に、キリスト教の聖書を原語から訳し直すことで見えてきた、聖書の本来の意味について語っていただいた。これまでの参加者は、宗教関係者をはじめ、西成区のホームレス支援関係者、阿倍野区の飲食店経営者、近所の方など、地域や職業分野を問わない多様な属性の方々である。講演後のCafeの時間は、自由な語らいの場となっている。阿倍野の近代長屋を活用したReligion-Cafeは、「宗教」を通じた、人々のつながりの場として、徐々に広まりを見せてきている。

■黒木宏一(阿倍野プラザ研究補助スタッフ)

現場プラザ短信7